

「旅路の果てに、恵みの神が・・・」

ヨハネによる福音書 4章 16～30節

送り出せ、荒れた空に鐘打ち鳴らし。

今、夜のしじまに年が去る。・・・

行かせよ、年を。

鐘打ち鳴らして送り出せ、古きを。

迎え入れよ、新しきを。・・・

古き年は去る。

行かせよ、年を。

鐘打ち鳴らして送り出せ、偽りを。

迎え入れよ、真実を。

送り出せ、心痛める悲しみを。

送り出せ、富めると貧しきの反目を。

鳴らせ、すべての者の救いの鐘を。

送り出せ、困窮と苦しみと罪、時の冷たい不信とを。・・・

送り出せ、我が悲しみに満ちる歌を。

しかして、迎え入れよ、豊かに奏でる歌い手を。

送り出せ、虚しきプライド、人の悪意と悪口を。

迎え入れよ、真理と正しきとを愛する愛、善きことを愛する広き愛を。

送り出せ、醜き病の古き傷跡を、卑しく狭き黄金の欲、過ぎ去り消える争いの幾千を。

しかして、迎え入れよ、平和の幾千を。

鐘打ち鳴らして迎え入れよ、雄々しく自由なものを、大きく広き心、優しく温かき手を。

地の闇を送り出せ。

しかして、鐘打ち鳴らして迎え入れよ、真のキリストを、真のキリストを。

19世紀イギリスを代表する詩人で、桂冠詩人としても知られたアルフレッド・テニソン (Alfred Tennyson) の詩からの抜粋です。古い年が行き、新しい年が明けようとするとき、どんな思いと祈りをもってこれを迎えようとするのか。そのことを静かに深く考えさせる響きが伝わってはこないでしょうか。時は年度替わりの4月。しかも、2021年のこの年は、イースターの主日をもって新年度が始まります。年の瀬から正月へといういわゆる年明けのそれとはやや趣は異なりますが、新たなスタートの時を迎えるという意味で、詩の響きにいま一度心を共鳴させてみたいと思っています。

ます。とりわけ、一年余にわたる新型コロナの騒動が依然として収束せず、私たちも教会も今なお、混沌とした状況の中に置かれています。この間 繰り返し自問させられてきた、大切な問題の数々。すなわち、教会とはそもそも何だったのか。主日に集う礼拝とは何だったのか。さらに言うなら、イエスを救い主キリストと信じ、これに救われるとはそもそもどういうことなのか。そして、主イエスに従い、そこで信仰の共同体を形成し、そのようにしてそこから世に遣わされていくとはいったいどういうことなのか。そうした本質的な事柄のあれこれを引き続き考えさせられています。つまりは、聖書の語る信仰の重要事が改めて 私たちの前に提示された、とも言えるのではないのでしょうか。

4月新年度を迎え、なおかつ 主イエスの復活を記念するイースターの主日をもってこれを始めようとしているこのとき、その新たな出発を再度、主イエスの復活のいのちに導かれて始めさせてもらいたい。そんなふうに願い祈るのは、この私だけでしょうか。テニソンの詩を想い浮かべつつ、主イエスの語りかけに心の耳を澄ませる。そのようにして聖書を読み進めるといっても許されるでしょうし、年度替わりの今月ならではの特権と言えるかもしれません。

昨年末の12月から、サマリアの女性をめぐる4章の出来事に入っています。今月はその3回目となります。サマリアの女性はこの後、同じく4章の39節以下で、もう一度登場してきます。ここでは どちらかという、彼女からイエス・キリストの話を聞かされた町の人々が主役となっていますが、いずれにしても、サマリアの女性に関わる記事は4章の大半、新共同訳の聖書で丸々2ページ以上に及んでいます。ヨハネによる福音書は主イエスとサマリアの女性の出来事に 実に大きなスペースを割いていることが分かります。それはとりもなおさず、聖書の信仰にとって重要な真理が一つならず そこに置かれているからなのでしょう。そこでは、私たちの「真の渇き」について、またその渇きを癒やす「いのちの泉」について、聖書の使信が語られています。さらには、「真実の関わり」とはどのようなものなのか。「礼拝の本質」とはどのようなものなのか。「救い主」とはどのようなお方か。「神」とはどのようなお方なのか。「信じる」とはどういうことか。「信仰における主体性」とはどのようなものなのか。そして、「証し」とは？「伝道」とは？・・・と、聖書のメッセージが数々示唆されています。しかも それらは、いのちのない因習や差別を乗り越えて 打算のない愛のうちにひたすらサマリアの女性を追い求められるイエス・キリストというお方の言葉と関わりとを通して語られ、示されています。つまり、主イエスを脇にやっっては しかるべきいのちの所在があやふやになってしまう、とヨハネの福音書は言いたいのではないのでしょうか。そんな箇所にいま一度 耳を澄ませ、真のいのちの源から生きた水を頂ければと願います。

今月の箇所は、前回学んだ礼拝をめぐる部分を除くと、主イエスの弟子たちが町から帰ってきたところから始まります。ヨハネは記します。27節、「ちょうど そのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた」。ユダヤの男性は、白昼 女性と「公」に話をするのを憚りました。しかも、相手はサマリア人で、そればかりか、見た目にもどこか崩れた札付きの女性です。弟子たちの内には、話を差し控えるよう 先生に言わなくては、と忠告の思い

が走ったかもしれません。がしかし、聖書は同じ節で、続けてこう記しています。「しかし、『何か御用ですか』とか、『何をこの人と話しておられるのですか』と言う者はいなかった」。要するに、そうは思ったけれども 口には出さなかった、ということなのでしょう。なぜでしょうか。弟子たちは もしかすると、それが理解しがたい驚くようなことであっても、主のなされることには何か意味があるにちがいない、と そう思い始めていたのかもしれません。そうであれば、主イエスへの信仰が深まりつつあったことを物語るものと言えるでしょう。けれども、事は単にそれだけでなく、それと同時に、緊張感を憶えさせる張り詰めた空気がその場を満たしていた、ということかもしれない。ある厳しさをもった空気がその場に満ちていた。ある種、聖なる緊張とでも呼ぶべきものがその場にあった、と そうも思われています。実際、サマリアの女性にとっては 一生に一度とも言える、文字どおり「一期一会」の出会いです。イエス・キリストはその彼女に向かって、魂の渴きを癒やすいのちの泉について語り、その源である霊と真理とによる礼拝について語り、そして「あなたの目の前にいるこの私が、事のすべてを明らかにするその救い主である」と告げられたのでした。そこには、張り詰めた空気が漲っていた。としたら、そこに口を差し挟むことに 弟子たちが言い知れぬ畏れを憶えたとしても不思議はないように思われます。

一生に一度とも言えるような、残り火のすべてを懸けた一途な求道の姿勢。私は、サマリアの女性の中にそうした姿勢を見させられます。そんな必死な 自らのすべてを懸けた求道だったからこそ、主イエスに出会ったそのとき、彼女の喜びは文字どおり「泉」のように湧き上がったのではないのでしょうか。聖書は 28 節、29 節で言います。「女は、水がめをそこに置いたまま 町に行き、人々に言った。『さあ、見に来てください。わたしが 行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません』」。驚くような変化です。人目を避けるためにわざわざ、誰もいない暑い昼日中を選んで 水を汲みに来ていた彼女です。人目に晒されたくなかった。冷たい視線を浴びたくなかった。どれほど 噂の種にされ、見下されてきたことでしょうか。その彼女が今なんと、自分の恥を曝け出して、主イエスを紹介しているのです。「わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます」と。醜くて知られたくない、隠しておきたい過去のすべて、です。信じられない変わりようではないのでしょうか。それは、単に恥ずべき過去だけでなく、人知れず流した涙や独り耐え抜いた苦しみ、さらには 自分でも分からなかった魂の深い渴きまでも、何から何まですべてを分かってくださっているお方がいる。そのお方が救い主として、今、自分の目の前にいてくださっている。そのことを発見した彼女の、こぼれ出るようなうれしさの発露だったにちがいません。心が弾んでいます。内から湧き出るものがあるからなのでしょう。何にも邪魔されない平安がその内に広がり始めているのを感じさせられます。サマリアの女性はイエス・キリストの慈しみに引き込まれてしまった。私の心捉えられる瞬間です。

これが、サマリアの女性の物語です。それは別な言い方をすれば、人生の旅路の果てに恵みの神を見出した女性の物語、とすることができないのではないのでしょうか。そして、それはまた、どのような境遇にしようとも 私たちの旅路の果てには必ずや恵みの神様がいてくださる、という そのような約束を告げる物語でもあるように思われます。私たちははたして、この約束を信じることができるで

しょうか。私は、信じます。具体的な仕方や形は別にしても、イエス・キリストはこの約束を告げるために私たちのもとに来られ、この約束を果たすためにこそ 十字架の上に命を^{ささ}げてくださいましたはずだからです。

今回は、このサマリアの女性との関わりで旧約聖書の物語を一つ、「創世記」から御紹介し、改めて御一緒に読み直してみたいと思います。それはヤコブの物語で、創世記の 25 章 19 節以下に記されています。サマリアの女性は「ヤコブの井戸」(4:6) で水を汲^くんでいました。そして、ヤコブを偉大な父祖として、誇りにしていました(4:11~12)。その光景を想うにつけ、井戸で水を汲むたびに、彼女は井戸を掘ったとされるヤコブに想いを馳^はせていたのではないかと そう思われてならないからです。そのヤコブとはいったい、どんな人物だったのでしょうか。実のところ、ヤコブの波乱に満ちた生涯を知れば知るほど、サマリアの女性との共通点の多さに驚かされるかもしれません。今回は、紙幅の関係で、前半の部分を 以前すでに御紹介した作家の阿刀田 ^{あとうだ たかし}高さんの文章で(『旧約聖書を知っていますか』より)、残りを私の要約で記したいと思います。ヤコブの物語は次のような出来事で始まります。さすが聖書をよく読んでおられ、短編小説の名手としても知られる阿刀田さんの文章で、生き生きとして分かりやすい語りとなっています。

アブラハムの子イサクはリベカを^{めと}娶り、リベカは双生児を生んだ。初めに現われたのはとても毛深い子で・・・エサウと名づけられた。エサウは「毛深い」という意味である。次に現われた子は、エサウの^{かかと}踵を握っていたので ヤコブ。これは「踵」にちなんだ命名らしい。おそらく二卵性の双生児だったろう。容姿も違うし、性格も異なる。

・・・父のイサクは暴れん坊の兄を愛し、母のリベカは賢い弟を愛した。世間によくあるパターンだろう。「男の子はきかん坊のほうがいい。外で遊んで、体さえ丈夫にしておけば なんとか生きて行けるさ」。父のイサクは、野獣の肉が大好きで、その点でも狩猟のうまいエサウが好ましかった。だが、母のリベカのほうは、「ヤコブちゃんはおつむがいいわ。東大にだって入れるかもしれないわよ」と、思慮深い弟のほうをかわいがった。・・・

ある日、ちょっとした事件が起きた。・・・弟のヤコブは、家で赤い豆をゆでていた。兄のエサウは狩りから帰って来て、「ああ、腹ペコだ。おっ、うまそうな豆だな。俺にくれ」と 鍋の中を覗^{のぞ}き込む。「あげてもいいけど、そのかわり 長男の権利を俺に譲ってよ」。「わかった、わかった。長男の権利なんか ^{くそ}糞くらえだ。腹が減ってちゃ、戦^{いく}さもできん。豆をくれ」。「誓ってよ、長子権を譲るって」。「いいとも。何でも誓ってやらあ」。・・・ほんのジョーク、ジョーク。エサウは本気ではなかつたろう。もともと、あとさきの考えもなく 動物的に行動するタイプだった。・・・長子権はやがて家長を継ぐ権利であり、財産の分与も特別に大きい。それと鍋いっぱい^{さるかにがっせん}の豆・・・。明らかに交換のバランスを欠いている。猿蟹合戦の、握り飯と柿の種よりまだひどい。・・・

このときはこれだけのこととして終ったが、やがて 本当に長子権の決定が問題となる時期がやって来る。父イサクも年をとり、眼が見えなくなった。——あと継ぎをはっきりさせておこう——と考え、長男のエサウを呼び寄せた。「今すぐに狩りに行って獲物を掴まえ、俺のためにおいしい料理を作ってくれ。そのあとで お前に祝福を与えてやろう」。リベカがものかげで聞いていて、——あら、祝福を与えるって、なにかしら——。考えるまでもない。いよいよ あと継ぎを長男のエサウに決定するつもりらしい。いったん神に誓われたら、もう動かさない。・・・——ヤコブちゃんはどうなるのよ——。永遠に兄を家長として敬い、兄に仕えなければならない。・・・——そんなの、許せない——

リベカは エサウが狩りに出て行くのを見とどけたうえで、ヤコブを呼んだ。「いい？ 仔山羊を殺して持ってらっしゃい。それで私がお父さんの大好きな料理を作ってあげるから。ね、それを、あなた、お父さんのところへ持って行きなさい。エサウ兄さんのふりをして。そうして 先に祝福を受けちゃえばいいのよ」と 唆す。ヤコブは驚いた。「お母さん、そんなことしちゃまずいよ。いくらお父さんの眼がわるくたって、触ればわかるもん。兄さんは毛深いし、俺はツルツルなんだから」と白い腕を撫でる。「腕に仔山羊の毛皮を巻いておけば平気よ」。「そんなひどいことしたら、神様の呪いを受けるかもしれないよ」。「いいえ。・・・万一 呪いがあるようなら、私が引き受けます。とにかく お母さんの言う通りにやりなさいッ」。まことに母は強し、であった。

ヤコブとしても・・・このチャンスを逃がしたら、あとで臍を噛む。おそろおそろ母の勧めを受け入れた。父好みの料理ができあがるのを待って、「さあ、お父さん」と、低い声で呟いて差し出す。「おう、おう。もうできたのか。・・・」。「神様のおぼしめしです」。「うむ。さ、俺のそばに来てくれ」。父のイサクも、なにかしら疑惑を覚えたのかも知れない。近づいた息子を抱き寄せ、腕に触って、「はて、声はヤコブのようだが、腕はエサウだ。わしの耳がおかしいのじゃろう」と、勝手に思い込む。料理を受け取って 葡萄酒と一緒に平らげた。ヤコブは身を堅くして、冷や汗を流しながら見つめていただろう。「うまい。さ、お父さんに口づけをしてくれ」。父はヤコブの口づけを受けたところでひさまずいて手をあげ、「どうか神様が天と地の豊かな恵みをお前に賜わりますように。そして、多くの穀物と新しい葡萄酒がいつもお前に恵まれるように。さらにまた、多くの民がお前に仕え、お前にひれ伏す。お前は兄弟たちの主人となり、お前を呪う者は呪われ、お前を祝福するものは祝福されるように」と神に祈った。

兄のエサウが帰って来たのは、このときである。エサウはなにも知らずに父好みの料理を作り、父の部屋へ入った。「お父さん、お待ちかねのものを持って来ましたよ」。「えっ？ いったい お前はだれなんだ」。「エサウですよ」。「そんな馬鹿な・・・。じゃあ、さっきの男はだれだった？ やっぱりヤコブか。もう遅い。わしはヤコブに祝福を与えてしまったぞ」。「ひどい。どういうことなんです？」。「ヤコブがお前に化けてやっ

て来て、祝福を先に奪ってしまった。もう どうにもならん」。[「なんてやつなんだ」。・・・「・・・お前は武器を持つ者となるだろう。弟に仕えることになるだろう。だが、いつかそのくびき軛から解放されるときがきつとやって来る。それだけだ」。父はつぶや呟いて 力なく首を垂れた。

エサウの怒りは当然のことだ。——ヤコブのやつ、汚い手を使いやがって。勘弁できん。殺してやる——。なにしろ 荒っぽい男である。弟を殺すことだってやりかねない。・・・

母のリベカはエサウの殺意を察知し、そっと ヤコブに伝えた。「エサウは瞬間湯わかし器でしょ。すぐに熱くなるけど、いまにさめるわ。しばらく顔をあわさずにいなさい」。「うん」。「ちょうどいい機会だから、ハランに行きなさいよ」。「ハラン？」一族の故郷であり、リベカが生まれ育った、あのハランである。「私の兄のラバンがいるわ。あなたのおじ伯父さんよ。あそこに身を寄せて、エサウの気持ちが収まるのを待ちなさいな」。・・・「ついでに ハランでお嫁さんを捜したほうがいいわよ。ここは駄目。異教徒の娘しかないから」。リベカは、イサクがかつて自分をめと娶ったのと同じ方法で、ヤコブが妻を捜すように勧めた。ハランの地で 一族の娘を・・・。この名目があれば、年輩いたイサクもヤコブの旅立ちを許してくれるだろう。

ヤコブの物語はこうして始まりますが、「なんてやつ奴だ、ヤコブってのは！」と腹立たしささえ感じるのは決して 一人や二人ではないと思われまふ。全くの話、母親のリベカもリベカですが、ヤコブもまた、やはり巧妙でずるがしこ狡賢い人間というほかないでしょう。このヤコブが、後にイスラエルの12部族の父祖となる そのヤコブなのです。こんな具合ですから、ここでもまた、何とか辻褄を合わせようと 実際、苦しい説明がなされたりもします。曰く、「ヤコブはここまでしつよう執拗で、かつ巧妙だったから、その熱心さと賢さをかわれて、イスラエルの父祖として選ばれたのだ。嘘も方便。神は良い素質を見抜かれたのだ」。ですが、私などはこうした説明を聞くと、「そんな馬鹿な！」と思わず声が出てしまいます。実のところ、なんとかして取り柄をひね捻り出し、だから 神が目をかけてくれたんだ、とこじつけた途端、聖書のメッセージは跡形もなく消え去ってしまうのではないだろうか。そう思わされています。私たちの内には、神の祝福を得るに値するものなど 何一つない。私たちは、それと引き換えに神の祝福を手に入れられるものなど 何も持っていない。それが聖書の一貫したメッセージであるように思うからです。でなければ、そもそも恵みであるはずのそれが、自身の力や人徳でもって 自分が獲得したもの、ということになってしまいます。そうではなく、聖書が語るのは ここでも再び、「にもかかわらず」の恵みなのではないのでしょうか。使徒パウロがイエス・キリストの迫害者だったにもかかわらず、なおも神の顧みの内に置かれ、キリスト教史上最大の伝道者とされたことは他の箇所ですでに触れたとおりです。サマリアの女性もまた、札付きの女だったにもかかわらず、尽きることのないいのちの泉を頂いた。同じように ヤコブもまた、なんとも嫌らしく狡賢い策謀家だったにもかかわらず、なおもイスラエルの信仰の父祖とされた、と

というのが聖書本来のメッセージだろうと思います。考えてみれば、ヤコブの物語ほど、人の嫌らしさやみすばらしさにもかかわらず、だからこそ そこに一方的に注がれる神の恵みの豊かさを鮮やかに描き出している物語もそう多くはないのではないのでしょうか。

ヤコブの残りの生涯を、要点のみ掻い摘まんで記してみましよう。

ヤコブは家を後にし、逃亡の旅に出ます。ほんのしばしの間のはずでした。しかし、それが母リベカとの最後の別れとなります。こうして、ヤコブは伯父ラバンのもとに渡り、20年もの間、ハラシで苦勞の多い汗と涙の時を過ごすこととなります。そして20年の後、再び、懐かしの故郷へと帰郷の旅立ちをします。ところが、行く手には何とも言えない重苦しさが漂っています。兄エサウの存在です。と そんななか、ヤコブの生涯を決定づける一つの出来事が起こりました。故郷近くの「ヤボクの渡し」に着いたときのことです。何が起こったのか。それは、夜通し続く ヤコブと一人の人との格闘でした。ふたりの必死な格闘が続きます。そして、夜明け近くになったとき、その相手はヤコブに勝てないのを見て、ヤコブの腿の関節を外し、そして言います。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」(創世記 32:27)。が、ヤコブは答えます。「いいえ、祝福してくださいまでは離しません」(同)。「お前の名は何というのか」(同 32:28)。「ヤコブです」(同)。そして、このとき、ヤコブはこう告げられるのでした。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は 神と人と闘って勝ったからだ」(同 32:29)。そして、祝福がヤコブに与えられたのでした。それは ヤコブのもとに現われた神の出来事だった、と聖書は記します。この後、ヤコブは兄エサウと20年ぶりの再会を果たします。そのときの様子を聖書は、「エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた」(同 33:4)と記しています。これもまた、ヤコブの不安を吹き払う恵みの出来事でした。ヤコブはこうして、イスラエル12部族の父祖としての歩みを始めます。これが、ヤコブの生涯でした。

であれば、私たちはここに何を見るのでしょうか。はたして何を、ここから示されるのでしょうか。それは、誰よりも人間臭いヤコブが、それにもかかわらず、むしろそうだからこそ、神の恵みが必要な者として その慈しみのもとに置かれた、ということではないのでしょうか。事実、ハラシに向かつて逃亡の旅に出たそのとき、ヤコブは夢で神の語りかけを聞きます。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。・・・見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ず この土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで 決して見捨てない」(同 28:13~15)。それは、ヤコブが本来 受けるべきものとは反対のものでした。ヤコブは逃げました。怒り心頭の兄のもとから、また 汚い謀略に何らかの裁きを下されるかもしれないその神のもとから、彼は逃げようと思いました。そう、ヤコブにとっては実は、それがむしろ 逃亡という行為の核心だったのではないのでしょうか。ヤコブは、兄のもとから はもちろんながら、が それだけでなく、心の深奥においては 実のところ、神のもとから逃げようとしたのではないか。そう思えてなりません。けれども、ハラシに向かつて逃げているとばかり思っていた彼・ヤコブはなんと、事もあろうに、その神の御手の中へと向かってい

た。神は、心動揺して怯える情けないヤコブにむしろ、恵みと慈しみの主として 御自身の平安の約束を与えられたのでした。

ヤボクの渡しにおける、神との格闘。それは、ただただ神の祝福を貰おうと一步も引かずに神と格闘したヤコブの姿でした。策略や交換条件の一切を投げ出し、空っぽの自分をぶつけて、ただただ必死に求めて、そして、ただ一方的な恵みとして 神の祝福を求めて迫った。ヤコブは長い旅路のなかで、自らの嫌らしさや醜さを、また勝手や情けなさを嫌というほど その身に思い知らされて歩んできたことでしょう。そのヤコブがしかし、このとき知らされたのだらうと思います。自分が実は恵みの神の御手の中に置かれていたということに、このとき気づかされたのではないのでしょうか。ヤボクの渡しにおける、神との格闘。それは、私の心には、自らを砕かれた者の必死な祈りの姿として迫ってきます。「聖なる負け犬」とでも呼ぶべき、必死な祈りの姿です。こうして、旧約聖書の恥とも言われたヤコブは旧約聖書の誉れと呼び変えられ、「踵を擱む者」、すなわち「躓かせる者」「策謀家」というその名は「神と争そう者」「神は支配し給う」との意の「イスラエル」という名に変えられたのでした。

ヤコブの生涯は山あり谷あり、石ころだらけの、乾いた荒れ野を旅する旅路のようでした。サマリアの女性はきっと、そのヤコブの井戸に言い知れぬ親しみを持っていたにちがいません。何年の旅路でしょうか。いずれにしても 決して短くない、もう何十年というその長い旅路は、期待と失望が繰り返した 傷の深く疼くものでした。同じような傷と不安に苛まれたヤコブです。しかも、そこから解き放たれ、祝福を頂いたヤコブです。サマリアの女性は きっと、そのヤコブを慕い、ヤコブへの憧れを持って 井戸に来ていたことでしょう。旅路の果てに 神様が父祖ヤコブに祝福を下さったように、この自分にも、旅路の果てに神様の祝福が・・・と。彼女はそのように、言葉にならない呻くような祈りを持って井戸に来ていたのではないのでしょうか。そして、そこに、イエス・キリストが来てくださった。思いがけない時に思いがけない所で 神がヤコブのもとを訪れてくださったように、同じように、思いがけず 彼女のもとを 主イエスが訪ねてくださった。そして、「この私があなたと一緒にいる」とおっしゃってくださったのでした。自らの醜さに泣き、嫌らしさにその身を嫌悪していても、また人に捨てられ、理解してくれる者が一人もいなくても、それにもかかわらず、それだからこそ、神が御自身の恵みを携え、旅路の果てにいてくださる。サマリアの女性の身に訪れた救いの出来事から、私はその真実を教えられ、そのことを イエス・キリストのゆえに信じる者とされています。

サマリアの女性はこのようにして、いのちの泉を発見しました。そして、内から湧き上がるうれしさを抑えきれずに、町へと飛び出していきます。見ると、そこに 彼女の水甕が残されています。(28) 我を忘れるほどのうれしさに、思わず 置き忘れてしまったのでしょうか。しかし、それはきっと、主イエスの喉を潤すものとなった。そして、主イエスもまた、その甕から喜んで飲まれたのだらうと思います。神の下さる喜びからこぼれ落ちるもの、それは神を喜ばせるものともなる。この物語は、そんなメッセージをも暗示しているのかもしれない。

これが、サマリアの女性の物語です。歴史を通じ、多くの人々にいのちの泉の源を教え、その渇きを癒やし続けてきました。そのようにして、イエス・キリストにある平安を送り届けてきました。その物語が今このときも、恵みの主の語りかけをこの私たちに届けようとしています。

その御声^{みこえ}を聴き取り、そして「いのちの泉」^{みいだ}を見出した一人の人を、終わりに御紹介いたしましょう。その方は、日本基督教団^{キリスト}の教会で長年^{ぼっかい}牧会に従事された角田^{つのだ}三郎^{さぶろう}という牧師です。陸軍士官学校の卒業という、珍しい経歴の持ち主でもあります。角田牧師は、入信^{あか}の証しとも言うべきその一文を次のように記しておられます。

主イエスはご自身を「命のパン」「羊飼い」「道」「門」などとたとえられましたが、私にとっては・・・「命の泉」といわれたことがいいようのない慕わしきとなっています。

子供のころ、私の育った横浜の郊外^{みつさわ}三ツ沢はいたるところに沢がありましたし、その沢を形成する谷川ぞいやその小川の奥に泉がありました。どじょうとりなどの一日の遊びで泥だらけになった私たちは、しばしばその泉で渇きをいやし、手足を洗い、そして、私たちの汚^{よご}れで黄色になってしまった泉がまたしばらくするとすっかり澄んでその底に湧きあふれる水によって躍る砂の姿を見せてくれることを、この上なくたのしいものと思っていたのでした。

また、戦争中 中国の東北部に飛行訓練のため渡った私は、もう一度死ぬ前に最後の望みをかなえられる日があつたら、内地へ帰って、山の^{ふるさと}あるいは故里の小川の泉を飲みたいものだと思切に思ったものでした。

そして 戦後、すべてのことが崩れて空虚になった心の中で、死を前にして最後の願いであった「泉」^{ふるさと}を求めて、私は故里^{ふるさと}のすべての泉や天狗^{てんぐ}の庭の泉や雪溪^{せつせい}末端^{まつたん}に奔る泉など、多くの山の中の泉を飲んで歩きました。そして、その時その時はまさにこれこそあの時に求めた泉であったかと思ったことでしたが、しかも、まちがいなく「また渴いた」のでした。

そのようなある日、私は天城山を縦走して、バプテストの天城山荘の前の道^{くだ}を降っていました。そしてそこに、「この水を飲む者はだれでも、また渴くであろう」という御言葉^{みことば}のしるされた泉を見たのでした。正直なところ、かなりのどの渴いていた私は「だれでもまた渴くであろう」などという泉のそばの御言葉に腹を立て、「このゴチゴチのクリスチャンめが！」と思ったのですが、その夜 寢床に入って考えれば、まさに私の今まで求めていた「泉」を求める旅はまた渴くための旅にすぎず、本当に求めていたものは「命の泉の主イエスそのお方である」と認めずにいられなくなったのでした。そして、その後^ごうまれた長女に「いずみ」と名づけたのです。それは、私のように外的な泉の慰めを求めて旅する者ではなく、本当の命の泉・主イエスを心のうちに信〔じ

て] 受 [け入れ]・・・慰めと命にみたされた者であってほしいというねがいからでした。

私自身にとって“いずみ”は、幼い日から父親になるまで このように魂の奥底に触れてくるものでしたから、主イエスが命の泉について語られたことがとても慕わしく、本当に自分の存在の根源の所に主が語りかけ、また 主がそこに命の泉としていますことを感謝せずにいられないのです・・・

少々しつこく書きましたが、私の祈ることは・・・主が皆さんの一人一人に実にふさわしく導かれることを一人一人に信じていただきたいし、また すべてに欠けなく主のすべてを啓示されなければ信じられないのではなく、どこか あなたのあなたらしい一点で主が出会おうとされている、そのことを考えていただきたい [という] こと [なの] です。

生けるいのちの^あ在り^か処を教え、その源を指し示す聖書の的確さ。その鋭さと深さに今さらのように驚かされるのはこの私だけでしょうか。それは、聖書というのは常に、人間が人間であるいじょう誰の内にも見られる人としての本質的な事柄について語るものだからなのでしょう。牧師の説教を聞いた女の子が^{かあ}お母さんに耳打ちします。「お母さん、先生はどうして、^{わたし}私^ちん家のこと知ってるのかなあ?」。笑えない話ですが、聖書は人間の本質的な事柄を突くがゆえに、その語るところは実際、私ん家で起こっていることであり、また^{あんた}貴方^ちん家で起こっていることでもあろうと思います。聖書はそのようにして、^{まこと}真のいのちに乏しい私たちの乾いた現実を指摘するとともに、と同時に、尽きることのないいのちの泉の所在を指し示して、私たちを救いへと招いているのではないのでしょうか。

年度替わりの4月。しかも、イースターの^{しゅじつ}主日をもってそれが始まる一年のスタートです。この年、私たちははたして、何に触れ、何を見出し、^{みいだ}何に出会うのでしょうか。誰に触れ、誰に出会い、そして どんな自分を発見するのか。何よりかにより、どこに・どんないのちを見出し、そこでいかなる生き方へと導かれて、押し出されていくのか。時宜を得、また時に^{かな}適った聖書の物語を与えられ、私はこのとき、それらのことにいま一度、思いを寄せたいと思っています。

送り出せ、荒れた空に鐘打ち鳴らし。

行かせよ、年を。

迎え入れよ、新しきを。

鐘打ち鳴らして迎え入れよ、雄々しく自由なものを、大きく広き心、優しく温かき手を。

鐘打ち鳴らして迎え入れよ、^{まこと}真のキリストを、^{まこと}真のキリストを。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたはいつも、傷がどこよりも疼く^{うず}ところに、渇きがどこよりも深いところに赴かれ、そこに御自身の身を置いてくださいます。サマリアの女性は私たちと無縁の他人ではなく、まさに私たち自身であることに気づかされます。あなたが御子イエス・キリストにおいて そのサマリアの女性のもとに赴き、そこにあなたのいのちを注いで、湧き上がるうれしきでその内を満たして下さったことを心から感謝いたします。

私たちもまた、サマリアの女性に与えられたと同じ慈しみを祈り求めます。願わくは、私たちにも、尽きることなく渇くことのない生けるいのちの水をお与えください。霊と真理をもって礼拝する心を養ってくださり、真^{まこと}の礼拝を通して その水を頂くことができますように。祈りの管を泉の在り処^{あか}に挿し入れます。祈りを通して御前^{みまへ}に立つ私たちに、その祈りにあつて あなたのいのちの水を豊かに与えてください。

再び、新たな年度が始まろうとしています。一年また一年と、私たちを少しく、あなたの御心^{みこころ}近くに歩める者としてくださいますように。そして、泉を求めて心を注ぎ出すすべての私たちを、あなたが御手^{みて}をもって守り導いてくださいますように。

御子^{みこ}の御名^{みな}でもって願い、お祈りいたします。

アーメン